

藍染

徳島県には何世紀にもわたる藍の栽培と染色の歴史があります。地元で生産される阿波藍は、その品質の高さを評価されています。伝統的な発酵技術による生産は手間と時間がかかりますが、現在でも行われています。イギリスの化学者ロバート・ウィリアム・アトキンソン（1850-1929）が、1870年代に日本を訪れた際に目にした豊かな青色に感銘を受けたと言われています。アトキンソンは「ジャパンプルー」という造語を生み出し、現在では日本のデニムファンを中心に世界的に知られるようになりました。それから約 150 年、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの公式エンブレムに藍色が採用されました。徳島では、藍染めの体験教室が開催されています。

徳島の藍の歴史

藍は室町時代（1336-1573）に阿波国（徳島県の旧名）に来たと言われています。藍の栽培は江戸時代から発展しました。藍の栽培は、県北部を流れる吉野川沿いの山岳地帯から畑にまで広がりました。頻繁な洪水により、この地域は稲作には不向きですが、豊かな土壌と豊富な水は藍に適していました。初代徳島藩祖であった蜂須賀家政（1558-1638）は、藍栽培を奨励し、産業の確立に成功しました。

江戸時代初期には、綿花の生産量が増加したことから、全国的に阿波藍の需要が高まり、染色に広く利用されるようになりました。藍色は、武家の厳しい時代に庶民が身につけることが許されていた数少ない明るい色の一つでした。これにより、需要はさらに高まってきました。

藍の栽培は 1903 年にピークに達しましたが、その後、安価な合成代替品が海外から輸入されたため、減少しました。しかし、徳島の藍生産の伝統が完全に途絶えることはありませんでした。近年、天然物や伝統的な工芸品への関心が高まり、阿波藍の知名度は再び高まっています。

藍染のプロセス

阿波藍の各生産者は、藍の製造と藍染めに独自の技術を取り入れています。基本的な手順は似ています。藍の葉を挽いて乾燥させた後、水掛けをし、約 3 ヶ月間発酵させます。このプロセスは、染色のベースとなる薬と呼ばれる刺激性物質を生成します。ただし、この段階の色素はまだ水溶性ではなく、さらに準備が必要となります。薬は、ブドウ糖液や酒、ふすま等を混ぜて、温度管理をしながらさらに 1 週間ほど発酵させます。

染料浴の準備ができれば、布を繰り返し浸していきます。浸すごとに、新しい層の青の深みがゆっくりと現れてきます。きれいな水で十分に洗い流し、乾燥させた後、時間の経過とともに藍の鮮やかな色が深まっていきます。

徳島市内には数多くのワークショップがあり、藍染体験や、ユニークなお土産を作ったりすることができます。